

## つめえり学生服に対するイメージに及ぼす要因について

松 浦 道 子\*

Michiko MATSUURA

### The Factors on the Image for a Closed Buttoned School Uniform

#### I 緒 論

現在、ほとんどの中学校や高等学校の制服あるいは標準服として、男子生徒によって着用されているつめえり学生服は、明治20年代から軍服を模して採用されてきたものである。このようなつめえり学生服が、制服として生徒の識別、統一を主な目的として着用されてきたのなら、他の衣服と同様に社会状況によって大きく変化してきた筈である。しかし実際には、社会の変化や機能性の問題などが指摘されながらも、<sup>1)</sup>100年近く経た今日なお、色・デザインなど基本的には全く変化していない。したがって、この問題に関しては身体的要因よりもむしろ、社会的要因や心理的要因が強く作用しているものと思われる。そこで、衣生活の自由化および多様化傾向の著るしい現在、つめえり学生服が生徒にどのように受けとめられているのかというイメージと、イメージに及ぼす要因を明らかにすることは非常に意義があることと思われる。

衣服の中でも、制服は特に社会性の強いものである。そのため、規定されている色やデザインは、着用者に対して特殊で多様な心理的諸反応をもたらす。この特殊な心理的諸反応は、決して独立的なものではなく、お互い密接な関連を保ちつつ作用しあっていると考えられる。中でも、イメージは人間のダイナミックな心理のプロセスの産物であり、知覚や思考それ自体ではないが、それらとわがちがたくとけあっており、人間の持つ概念、判断、好悪や態度をもたらす総体を示す概念であるとみなされている。<sup>3)</sup>また、イメージ用語として選定できる形容詞対は内包的な意味を表現するため、つめえり学生服が生徒にどのように受けとめられているかという流動的な感情値を計る尺度として、特に適しているものと思われる。よって、本研究では、つめえり学生服に対するイメ

ージと、このイメージに影響を及ぼす嗜好や着心地、色とデザインに対する評定、衣服の自由化に対する態度などを明らかにし、さらに各概念間の関連を性や年齢による違いによって検討することを目的とした。

#### II 調 査

##### 1. 調 査 対 象

つめえり学生服を採用している島根県内の中学校および高等学校について、都市部と郡部よりそれぞれ2校ずつを選び、アンケート調査を行なった。調査人数は2年生男女合計524名であった。そのうち有効回収数は、高校男子111名、同女子127名、中学校男子99名、同女子89名、合計426名であった。

##### 2. 調 査 時 期

1975年6月中旬～下旬に行なった。

##### 3. 調 査 方 法

調査方法は質問紙法によった。中学生には調査者が、調査項目を説明しながら直接行なった。これに対し、高校生には留置法を用い担任教師を通じて回収した。

つめえり学生服に対するイメージ調査は、7段階評価によるオズグッドらのS.D法を用いた。<sup>4),5)</sup>イメージ調査にはイメージ用語が重要な意味をもつので予備調査を行なった。すなわち、制服および自由な衣服から連想することや感じることを自由記述してもらい、その中から衣服を表現する広範なイメージ用語を収集し、さらにオズグッドの指摘する意味空間において、「評価—evaluative」「力量—potency」「活動—activity」を基準にして30対のイメージ用語を選定した。用語を呈示する順序は、順序効果が生じないように3種類にわけた。

その他、嗜好と着心地については5段階評価、色とデ

\* 島根大学教育学部家政研究室

デザインと衣服の自由化に対しては3段階評価も用いた。

### Ⅲ 結果および考察

#### 1. イメージについて

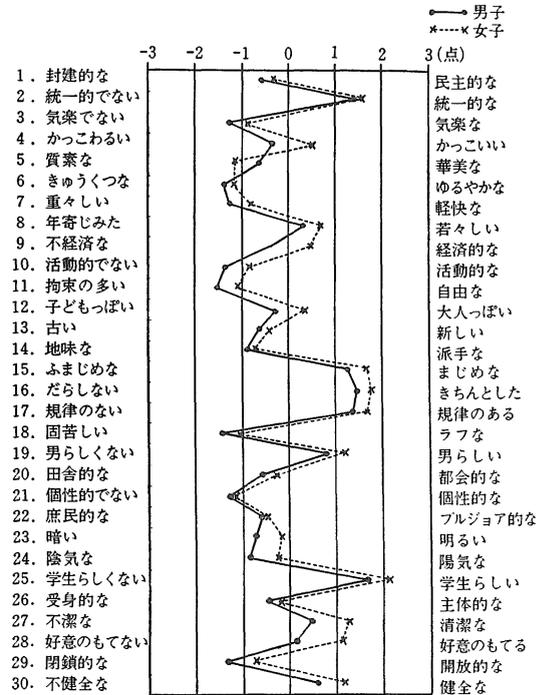
1.1 つめえり学生服に対するイメージのプロフィール  
回収した調査用紙は次の要領で分類し比較検討を行なった。

中学男子…… J-M群 高校男子…… H-M群  
中学女子…… J-W群 高校女子…… H-W群

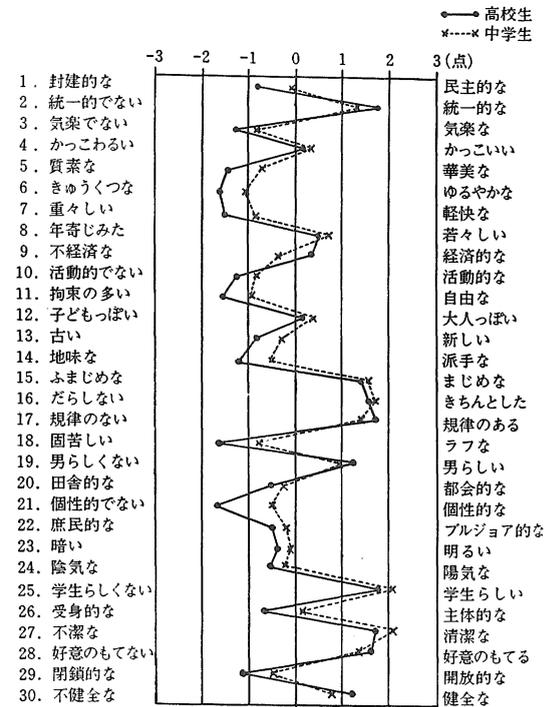
つめえり学生服に対する30対のイメージ用語を、7段階評価によって得点化したプロフィールは、第1図および第2図に示される通りである。第1図によって、男子と女子の差異をみると、男女ともプラスの得点の高いイメージは、「学生らしい」「きちんとした」「統一的な」「規律のある」「まじめな」などであり、マイナスの得点の高いイメージは、「きゅうくつな」「かた苦しい」「拘束の多い」「重々しい」「気楽でない」などであった。すなわち、つめえり学生服は学校の服装規定によって定められた制服であるため、規定された衣服のもつ象徴性や容儀性に関するイメージと、機能性や審美性に対するイメージとが強く意識されているようである。このように得点の傾向は男女とも同じであるが、男子より女子の方が全体的に高い得点であった。つまり、女子が男子よりつめえり学生服に対してプラスのよいイメージを持っているものと考えられる。そして、男女差の大きいものは、「かっこいい」「清潔な」「若々しい」というような、視覚によって意識される外観的イメージと、「活動的でない」「重々しい」という着心地から生じる機能的イメージに関するものであった。この傾向が顕著にあらわれているのは、男女が相互に逆のイメージをいっているものにみられた。すなわち男子にとっては、「かっこ悪く、不経済で、子供っぽい」と受けとめられているけれど、女子にはむしろ「かっこよく、経済的で、大人っぽい」と感じられているのである。つまり、外観的なファッション性のみならず、年齢や経済性に関しても受けとめ方が異なっていた。これらはいずれも、t検定により1%あるいは5%水準で有意差が認められた。

これらの男女差は、男子は実際につめえり学生服を着用しているのに対し、女子は常に見る立場にあることなどに起因しているのではないと思われる。

つぎに年齢による違いをみると第2図に示されるように、高校生は中学生よりマイナスのイメージが強い傾向がみとめられた。そして、年齢の差の大きいものは、



第1図 イメージのプロフィール (性別)



第2図 イメージのプロフィール (年齢別)



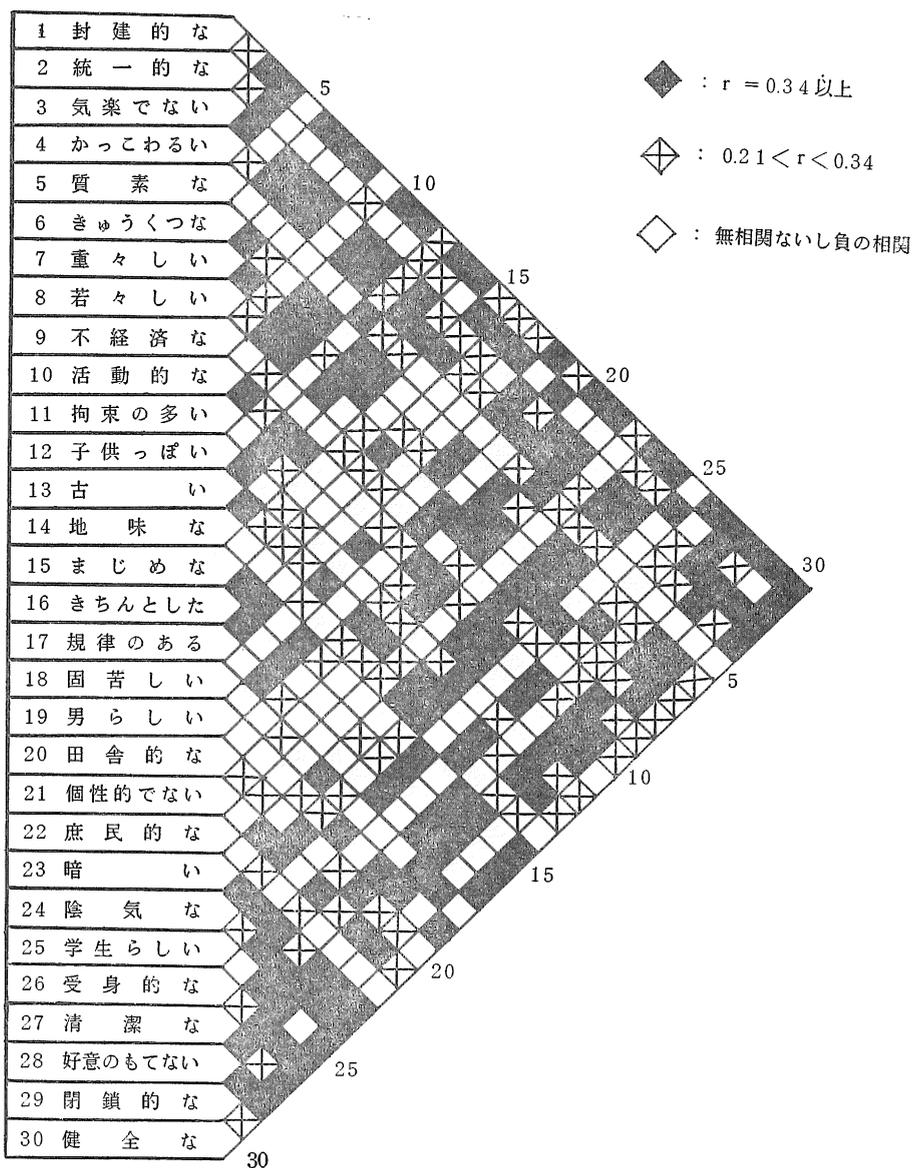
いまいな意味しか持たないが、中学生や高校生にとっては「統一的な」「きちんとした」「まじめな」「規律のある」などの要素を持つものであると考えられる。

1.2 つめえり学生服に対するイメージ用語の相関関係

J-M群, J-W群, H-M群, H-W群のそれぞれについて、つめえり学生服に対するイメージ用語の相関関係を要素とする相関行列を分散・共分散行列より求め

た。第3図は、中学男子について30コのイメージ用語間の相関係数( $r$ )を、自由度 $N-2$ ( $N$ =対象者数)において

- ①0.1%水準で高度に有意な正の相関関係 ( $0.33 \leq r \leq 0$ )
- ②0.1~0.5%の範囲で有意な正の相関関係 ( $0.20 < r < 0.33$ )
- ③無相関ないし負の相関関係



第4図 イメージの相関ダイヤグラム (高校男子)

に3分して、ダイアグラムに表わしたものである。(なお、負の相関関係はほとんどなかったので省略する。)同じく、高校男子について示したのが第4図である。第3図と第4図からわかるように、男子の場合、イメージ用語の相関関係は高校生の方がかなり高いという傾向を示した。このことは、年齢がすすむにつれて多様なイメージは集約化されるのであろうということを示すものである。

女子についても、男子の場合とほぼ同様の傾向がみられた。

以上の結果より、青年期において衣服を表現できる多様なイメージ用語の集約化は、性差よりも年齢すなわち、着たり見たりした期間の長短に影響されるものと思

われる。そして、学生服として非常に長い伝統をもった衣服であるという背景のもとで、「学生らしい」というイメージが特に高い得点であったこともあわせて考えると、「つめえり」と聞けば「学生らしい」と反応するような、なかば条件反射的な固定概念が形成されていくものと考えられる。

### 1.3 因子分析

つめえり学生服に対するイメージをさらに検討するため、30コのイメージ用語を変量としてセントロイド法によって因子分析を行なった。まず、各群に対し相関行列をもちいてイメージ用語の因子負荷量を算出しまとめた。J-M群、H-M群についてはそれぞれ第1表と第2表

第1表 イメージの因子負荷量 (中学男子)

イメージ用語	I	II	III
1 好意のもてる	0.71	0.30	-0.16
2 かっこわるい	0.67	0.13	-0.38
3 古い	0.67	-0.24	-0.32
4 固苦しい	0.66	-0.30	0.25
5 若々しい	0.65	0.09	-0.17
6 閉鎖的な	0.65	-0.29	0.19
7 拘束の多い	0.61	-0.36	0.15
8 田舎的な	0.61	-0.15	-0.26
9 健全な	0.61	0.35	0.17
10 重々しい	0.59	-0.36	0.17
11 陰気な	0.58	-0.20	0.12
12 学生らしい	0.56	0.47	-0.18
13 主体的な	0.54	0.09	-0.17
14 暗い	0.54	-0.34	0.23
15 男らしい	0.53	0.32	-0.16
16 清潔な	0.50	0.40	0.28
17 気楽でない	0.48	-0.43	0.18
18 封建的な	0.45	-0.25	-0.17
19 活動的でない	0.43	-0.15	0.31
20 個性的でない	0.43	-0.38	-0.22
21 きゅうくつな	0.41	-0.36	0.36
22 規律のある	0.39	0.62	0.17
23 きちんとした	0.45	0.54	-0.09
24 まじめな	0.37	0.50	0.13
25 地味な	0.40	-0.46	-0.29
26 統一的な	0.17	0.42	0.35
27 庶民的な	0.07	-0.12	-0.37
28 不経済な	0.29	0.22	0.33
29 質素な	0.34	-0.36	0.32
30 大人っぽい	0.35	0.29	-0.14
寄 与 率	0.39	0.18	0.09

第2表 イメージの因子負荷量 (高校男子)

イメージ用語	I	II	III
1 かっこわるい	0.70	-0.09	0.09
2 田舎的な	0.69	0.15	0.19
3 固苦しい	0.67	0.30	-0.20
4 古い	0.65	0.20	0.21
5 拘束の多い	0.63	0.46	-0.25
6 若々しい	0.63	0.09	0.18
7 重々しい	0.61	0.35	-0.26
8 好意のもてる	0.59	-0.26	-0.29
9 気楽でない	0.56	0.45	-0.28
10 暗い	0.56	0.20	-0.12
11 個性的でない	0.55	0.42	0.22
12 男らしい	0.55	-0.42	-0.12
13 閉鎖的な	0.55	0.40	-0.23
14 活動的でない	0.55	0.29	-0.34
15 きゅうくつな	0.54	0.42	-0.27
16 陰気な	0.54	0.27	0.18
17 地味な	0.52	0.52	0.15
18 質素な	0.48	0.48	0.32
19 庶民的な	0.45	0.31	0.31
20 受身的な	0.44	-0.12	0.28
21 封建的な	0.36	0.17	0.17
22 まじめな	0.29	-0.69	0.14
23 きちんとした	0.42	-0.68	0.12
24 統一的な	0.15	-0.62	-0.14
25 学生らしい	0.40	-0.56	-0.19
26 清潔な	0.54	-0.55	0.07
27 規律のある	0.36	-0.52	0.30
28 健全な	0.33	-0.50	-0.20
29 不経済な	0.31	-0.16	-0.37
30 子供っぽい	0.27	-0.27	0.26
寄 与 率	0.39	0.24	0.08

に示される通りである。この因子負荷量は、各因子ともとのイメージとの相関関係を意味し、1に近い値をとるほどその因子と高い相関のあることを示すものである。そして情報量の大きい因子から順次抽出されるから、第1表に示した中学男子の場合、第1因子によってイメージ全体の51%が説明され、第2因子で18%、そして第3因子では7%が説明された。つまり第3因子までで全体の76%が説明されることがわかった。そしてこれらの因子について解釈すると、

第1因子は、「かっこ悪い」「田舎的な」で代表される現代因子

第2因子は、「規律のある」「きちんとした」で代表される規律因子

第3因子は、「不経済な」「質素な」で代表される経済因子

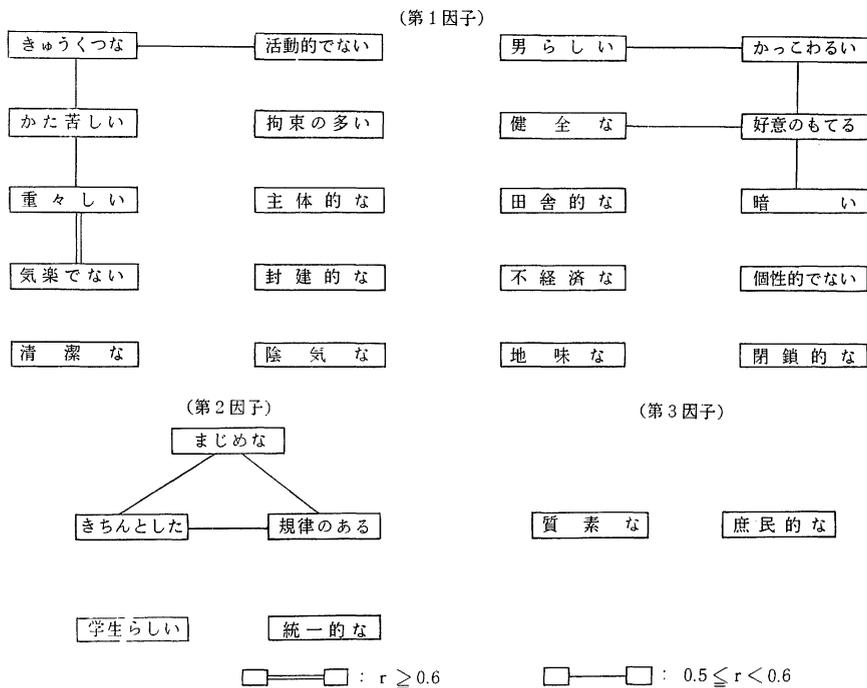
と考えられる。

その他、女子の2群についても現代因子、規律因子、経済因子が抽出でき、これらの3つの因子でいずれもイメージ全体の68~76%が説明されることになり、因子負荷量の推定、共通因子数、因子の解釈に関しては、性や

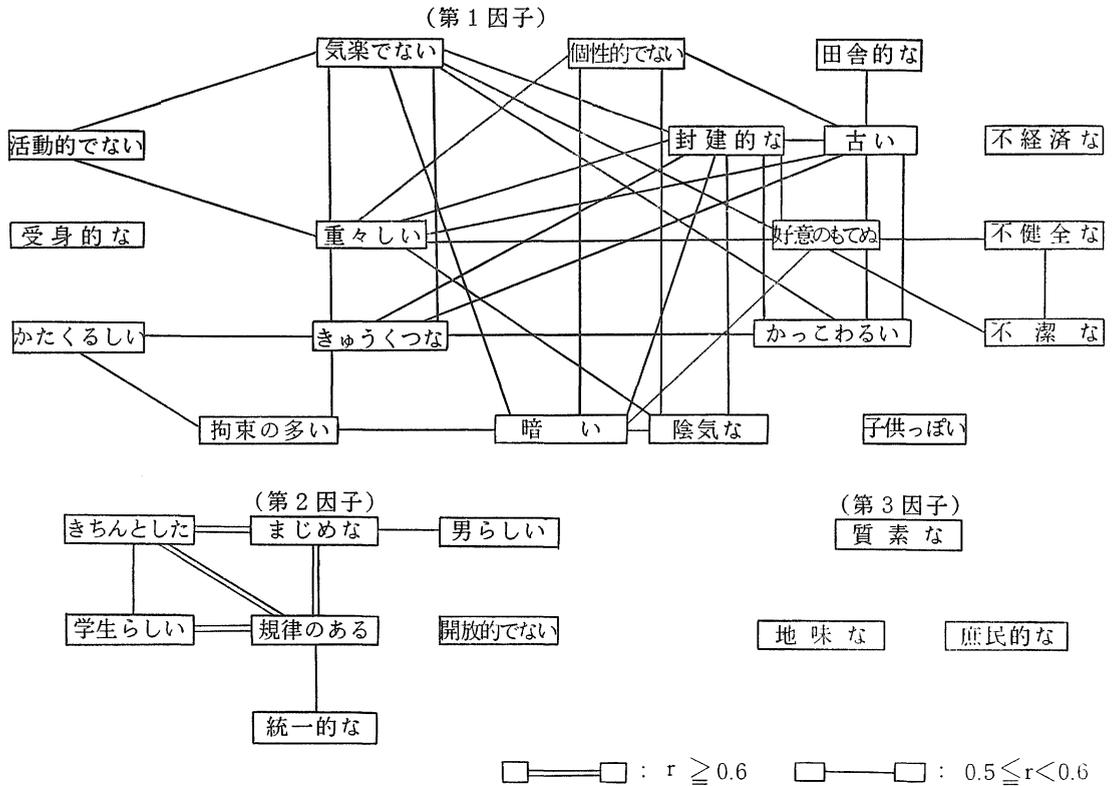
年齢による違いはみとめられなかった。

これら3つの因子を、川崎らの調査による20~25才程度のヤングミスのタウンウェアを対象として抽出した因子—現代性因子、女らしさ因子、年齢因子、所属因子—と比較してみると、今回の調査のように学生服、しかも制服として規定されている衣服については、その規定されている側面が強くあらわれ、一般の衣服の場合とはかなり異なっていることが理解できた。そして男子の場合、学生服を歴史的に考察すると、規律と経済性が大きな要因となって制服として制定されてきたようであるが、今日においてもこれらの規律因子と経済因子は、いぜんとして大きなウェイトをしめていることがみとめられた。しかし、現代のような衣生活の自由化や多様化の著しい中では、因子寄与率よりみて、やはり現代因子、換言すればファッション因子は無視できなくなっているものと思われる。

さらに、3つの因子を形成する個々のイメージ用語を因子ごとに取り出し、前述の相関関係に基づき、特に相関の高いもの ( $r=0.50$ 以上) を取り出して行なった関連を第5図と第6図に示した。まず、第1因子を構成す



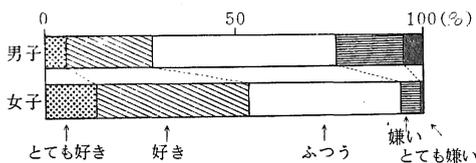
第5図 因子を構成するイメージ用語の関連 (中学男子)



第6図 因子を構成するイメージ用語の関連 (高校男子)

るイメージのパターンをみると、中学生は外観的なイメージ、機能的なイメージと規律に関するイメージがそれぞれ結びあって形成したグループと、その他の独立したものとからなり、多様な構成をなしていた。これに対し、高校生は互いに相関をもち、1つのグループを形成していることが認められた。

女子の場合は、2群とも中学男子とほぼ同じ傾向がみられ、第1因子には多くのイメージがかかわりをもっていることがわかった。そして、高校男子にみられた現象は、年齢がすすむにつれてみられる集約化が特に顕著にあらわれたものと思われる。第2因子および第3因子については、各群間の差はほとんどみられなかった。



第7図 嗜好の比較

## 2. 嗜好について

### 2.1 嗜好

つめえり学生服に対する嗜好の割合は、第7図に示される通りである。嗜好は、中学生と高校生という年齢ではほとんど差はなく、男女による違いがみられた。つめえり学生服を好む者は、男子で27.6%、女子では53.4%であり、女子の割合は男子の約2倍であった。これに対し、嫌うものは、男子が24.7%、女子5.7%であり、男子の割合は女子の約3倍であった。 $\chi^2$  検定を行なうと、1%水準で有意差がみとめられた。以上のように、つめえり学生服は着用者である男子にはあまり好まれておらず、むしろ女子の方に好感をもって受けとめられているようである。

さらに、この男女差の原因を嗜好の理由にもとづいて検討を行なった。まず好む理由についてみると、「学生らしい」というのが、男子で34.4%、女子では66.7%とともに第1位であり大きな割合をしめていた。つぎに、男子の好む理由は、「統一的」「男らしい」「衣服に気を使わなくてもよい」「経済的」となっており、いずれも10%たらずであった。女子の方は、「男らしい」「規

律がある」「清潔感がある」というのが、それぞれ22.5%、16.2%および14.4%となっており、これと比べると男子の理由は、所属にふさわしい外観であるという理由のみならず、簡便性によっても嗜好は影響を受けているものと思われる。また嫌う理由をあげてみると、男子の場合「きゅうくつ」「活動的でない」「強制・拘束的」

というのが、それぞれ65.5%、20.7%および13.8%を示した。そして、女子の場合では「きゅうくつ」「暑苦しそう」というのがいずれも37.5%となっていた。このように、男子は着心地がよくないということが嫌う理由となっているようである。この着心地の悪さが傍観者である女子にも感じられ、嫌う理由になっていることは興味深い。このため、着心地については着るものにとっても、見るものにとってもあまりよくない衣服であるといえそうである。

## 2.2 イメージと嗜好との関連

嗜好の違いによるイメージ用語の得点を示したものが、第8図と第9図である。まず、男女によって比較を行なうと、男女とも「好き」なものはプラスのイメージの得点が高く、「嫌い」なものはマイナスの得点が高いというように、外側から「好き」「ふつう」「嫌い」の順にはほぼ同心円状になっていた。すなわち、つめえり学生服によるイメージを持っているものは「好き」であり、悪いイメージを持っているものは「嫌い」となり、イメージのよい、悪いと嗜好との関係はほぼ一致していることがわかった。したがって、嗜好はイメージを決定する一要因であると理解できる。

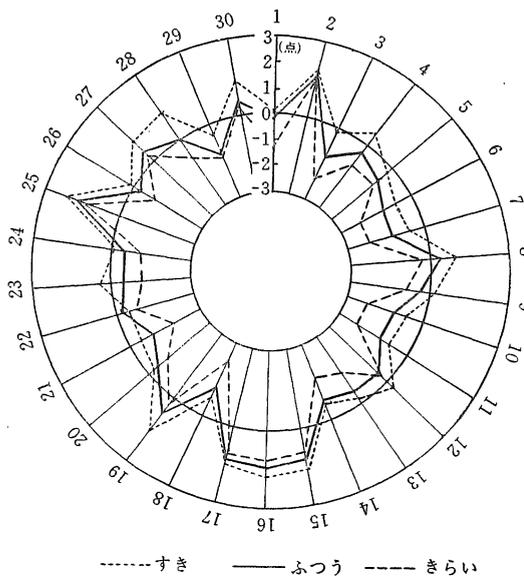
さらに、30コのイメージ用語の中でもどれが強く嗜好に影響を及ぼすかをみるため、「好き」と「嫌い」とにわけて得点差の大きいイメージをあげると、男子は「かっこいい」「気楽な」「軽快な」などであり、女子は「かっこいい」「新しい」「気楽な」などであった。また得点差の小さいイメージは、男子で「規律のある」「ブルジョア的な」「統一的な」などであり、女子では「大人っぽい」「統一的な」「まじめな」などであった。このように、男女とも嗜好に強く影響するのは、外観的なファッションイメージであり、影響の少ないのは規律や所属に関するイメージであった。

年齢による違いも比較した結果、やはり同じような傾向がみとめられた。

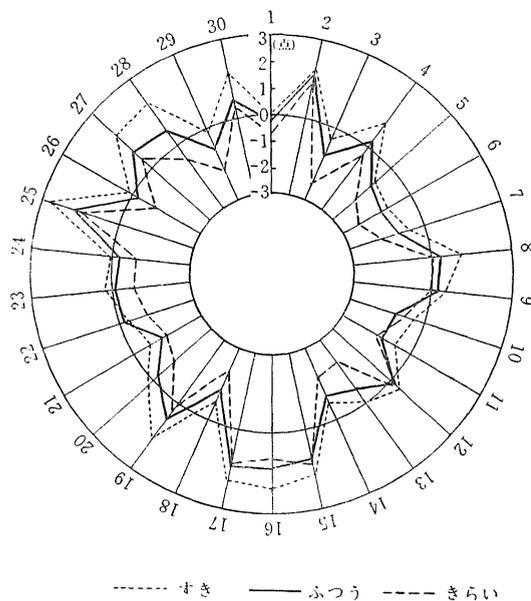
## 3. 着心地について

### 3.1 着心地

今日でも、男子学生服といえば大体つめえり学生服といってよいほど、つめえり型の学生服が普及している。それは名前の通り、つめえりというえりの型に特徴をもち、内側にセルロイド製のカラーをつけて着用する。このようなつめえりに対して、1975年5月中旬に着心地に関して予備調査を行なった結果、「首のまわりがきゅうくつ」というようなえりに関するものが、非常に多く指



第8図 イメージと嗜好の関連 (男子)



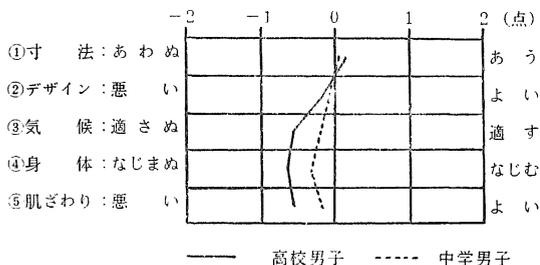
第9図 イメージと嗜好の関連 (女子)

摘された。

そこで、着心地としては特にえりをとりあげ、水梨ら<sup>9)</sup>の調査を参考にして、えりの着心地に影響を及ぼすと思われる次のような3つの性質に関連する5項目について調査を行なった。

- ① サイズ・縫製・型
  - 1) 寸法があうか否か
  - 2) デザインが良いか悪いか
- ② 生理・衛生的性質
  - 1) 気候に適したデザイン・材質であるか否か
- ③ 物理・化学的性質
  - 1) 身体になじむか否か
  - 2) 肌ざわりが良いか悪いか

結果は第10図に示される通りである。高校生は中学生より全体的に得点が低く、着心地は悪いと感じているようである。また、全体的に平均値の高い項目からあげると、①-1)、①-2)、②-1)、③-2)、③-1)の順となった。ある程度個人で調節できる寸法に関する項目だけが0.12とわずかではあるがプラスの得点で、あとは総じてマイナスの得点となった。つまり、物理・化学的にも生理・衛生的にも着心地はやや悪いということを示すものである。



第10図 えりの着心地

まず寸法についてみると、中学生や高校生という年代は身体の成長の著しい時期である。これに関して、柳沢ら<sup>10)</sup>によると、13才から18才までの期間に首付根回りは5.3cm増加すると報告されている。しかも、首節は頭部と軀幹部を接続する部位である。したがって、廻旋や前後傾などの広範な関節運動を行なう非常に重要な部分である。それにもかかわらず、学生服はほとんどが既製品であり、その寸法は学生服規格寸法により、胸回り、上衣丈、ゆき丈を用いて表示されている。しかし、同報告によると首付根回りと胸回りの相関係数は0.53で、相関はそれほど高くないという事である。したがって、このような表示法にもとづくつめえり型は、購入する際に

個々人の首の太さにあわせにくいし、また短期間の間にあわなくなってくるであろう。したがって、カラーを用いて首にぴったりあわせ固定することを特徴とするつめえり型は、成長が激しく活動の活潑な青年期のものが着用するデザインとしては、あまり適当ではないと考えられる。

次に視覚的にみるえりのデザインは、よくも悪くもないと考えられているようである。

さらに、物理・化学的性質と生理・衛生的性質に関連する項目についてはいずれも得点が低く、着心地を低下させる原因になっているものと思われる。なかでも、気候への適合性と肌ざわりについては、中学生に比べて高校生はかなり低い得点を示し、*t* 検定により5%水準で有意差がみとめられた。よって、着心地の悪さはつめえりというデザインのみ起因するのではなく、セルロイド製のカラーによる影響もかなり大きいのではないかとと思われる。身体をおおう役目をする被服材料は、いわば第2の皮膚と呼ばれるべき役目を持つものである。そのために、硬くて伸縮性・吸湿性や通気性などの全くない材料を直接に肌へあてることには、かなりの異和感を覚えるのであろう。この異和感は着用するにしたがって、慣れによってなくなるのではなくむしろ増加してくるようである。

また気候への適合性に関して、着用期間の問題がある。各学校の服装規定によると、着用期間は10月から5月頃までと半年以上にわたっている。そのため、合服と冬服を兼ねることにもなるので、デザイン的にも材料的にも無理が生じているものと思われる。

以上のように、えりに関しては着心地を考慮すると、ゆったりとして首の運動を妨げることのないデザイン、柔軟で吸湿性や通気性などの生理・衛生的性質を十分に備えた材料への改良が早急に望まれる。

えりの着心地と関連して、つめえり型をもし他のデザインに変更する場合に、どのようなデザインを希望するかという質問に対しては、中学生の場合「えりの高いもの」というように審美性重視の割合が30.9%と一番多かった。このえりの高いものというのは、生徒の間に流行しているカルダン学生服を希望するものも含めている。このカルダン学生服は高いつめえりで、身頃も非常にフィットしていて、通称「かっこいい」学生服である。一方では、つめえりはきゅうくつで着心地は悪いと認めながら、他方ではそれらをさらに助長させるような機能性を無視した流行の影響を受けている姿が浮かびあがる。また、43.6%と半数近くのもの「かえなくてもよい」と現状を肯定しており、これらから判断すると、

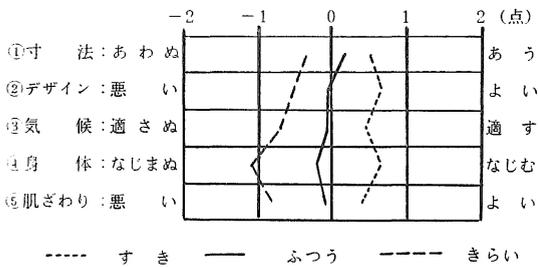
中学生の段階ではつめえり型は肯定的に受け入れられているようである。

また高校生では、「えりなし」「首のゆるやかなもの」「えりの低いもの」というような、機能性を重視したデザインを希望するものが36.2%で最も多かった。ブレザー型を希望するものも1/4みられた。このブレザー型は、機能性と審美性を兼備しているが、希望する理由に、「暑苦しくないように」などがあげられているように、どちらかといえば機能性を重視してブレザー型という具体的なデザインを希望したものと思われる。そして、「変えなくてもよい」という現状肯定が29.3%あり、審美性を重視したものを加えると、39.7%となりつめえり型を肯定しているものは中学生の1/2である。

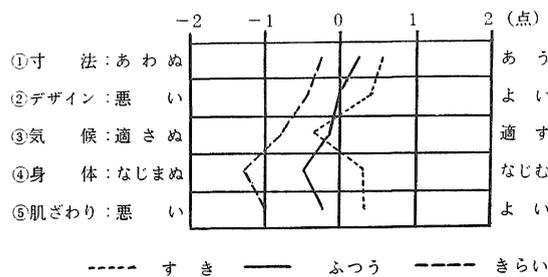
以上のことより、高校生は中学生よりも機能性をより重視しているため、つめえり型を支持する割合が低かったものと思われる。

3.2 着心地と嗜好との関連

えりの着心地と嗜好との関連を示したものが第11図と第12図である。中学生も高校生もつめえり学生服を好むものは、えりの着心地の得点が高く、嫌いなものは得点が低くなっていた。つまり、着心地がよいと思うものは学生服を好んでおり、悪いとするものは嫌いであるとい



第11図 えりの着心地と嗜好との関連 (中学男子)



第12図 えりの着心地と嗜好との関連 (高校男子)

える。よってえりの着心地と嗜好は関連が高く着心地は、嗜好を決定する大きな要因であると思われる。なかでも、身体になじむか否か、肌ざわりがよいか悪いかの物理・化学的性質に関連する項目は、他の項目に比べて嗜好による得点差が大きく、着心地の中では嗜好への影響が最も強いと思われる。

4. デザインと色

4.1 デザイン

デザインに対する評定は、第3表に示される通りである。男女による比較をすると、男子は「よい」と「悪

第3表 デザインについて (%)

項目	中 学		高 校	
	男子	女子	男子	女子
とてもよい	5.0	6.5	6.5	4.5
よい	13.2	23.1	13.2	30.1
ふつう	69.4	58.3	62.8	56.4
わるい	9.0	9.3	17.3	6.8
とてもわるい	3.3	2.8	4.1	2.3

い」がともに16.9%で同じ割合であった。これに対し女子は、「よい」と「悪い」がそれぞれ32.4%と10.4%でありよいと思うものが多かった。X<sup>2</sup> 検定によって1%水準で有意であった。

また、年齢別による比較をすると、男子では高校生に「悪い」と思うものが多く、女子では高校生に「よい」と思うものが多かった。

4.2 色

現在のつめえり学生服の色は、ほとんど黒である。こ

第4表 色について (%)

項目	中 学		高 校	
	男子	女子	男子	女子
とてもよい	9.2	14.0	5.7	9.7
よい	27.5	43.0	26.0	47.8
ふつう	52.5	37.4	48.8	35.8
わるい	5.0	4.7	13.8	5.2
とてもわるい	5.8	0.9	5.7	1.5

の色に対する評定を示したものは、第4表に示される通りである。「よい」と答えたものが男子では34.1%と約半であるのに対し、女子は57.2%と過半数をこえていた。そして、逆に「悪い」と答えたものは男子に多く、それも高校男子に多くみられた。この男女差は大きく、 $\chi^2$  検定によって1%水準で有意差がみとめられ、男子よりも女子の方に好感をもたれているようである。

色が「悪い」と答えたものは少数であるが、それらのものの中で黒のかわりに希望する色は、男女とも白、青紺といった明るくさわやかな色、清潔な色であった。そのため、黒を「悪い」とするものは暗く不潔な色として受けとっているものと思われる。

#### 4.3 デザイン・色と嗜好との関連

デザインと嗜好、色と嗜好との関連を示したのが第5表と第6表である。まず、デザインに関して男女とも約60%のものが嗜好と一致しており、これらのものにとってはデザインは嗜好決定の強い要因になっているものと

第5表 デザインと嗜好の関連 (%)

	項 目		男 子	女 子	全 体
	デザイン	嗜 好			
一 致	よ い	好 き	10.8	27.8	61.3
	ふ つう	ふ つう	39.8	30.8	
	わ るい	嫌 い	9.5	3.8	
不 一 致	よ い	嫌 い	0.8	0.8	38.6
		ふ つう	4.6	5.1	
	ふ つう	好 き	14.9	22.4	
		嫌 い	13.3	2.1	
	わ るい	好 き	1.7	2.5	
		ふ つう	4.6	4.6	

第6表 色と嗜好の関連 (%)

	項 目		男 子	女 子	全 体
	色	嗜 好			
一 致	よ い	好 き	17.4	38.8	60.0
	ふ つう	ふ つう	29.8	21.9	
	わ るい	嫌 い	8.7	3.4	
不 一 致	よ い	嫌 い	3.7	3.4	40.0
		ふ つう	13.6	15.2	
	ふ つう	好 き	8.7	13.5	
		嫌 い	11.6	0.8	
	わ るい	好 き	2.1	0.8	
		ふ つう	4.5	2.1	

思われる。残り40%のものは、嗜好と一致しておらず、これらのものにとってはデザインよりもむしろ他の要因により強く影響を受けているものと思われる。

次に色に関しても、男子は55.9%、女子は64.1%のものが嗜好と一致しており、女子に対してやや影響力は強いようであるが、いずれも嗜好決定の要因になっているものと思われる。

また、 $\phi$ 係数を求めてデザインと嗜好、色と嗜好との関連性を比較すると、デザインと嗜好……0.75、色と嗜好……0.63となり、デザインの方がより強く嗜好に影響を与えていることがみとめられた。

#### 5. 衣服の自由化

デザインや色に対する評定と着心地及び嗜好やイメージなどの総合的な概念が、複雑にからみあって学生服の自由化か否かという判断がなされ態度となる。

学生服として自由な衣服を希望する割合を示したのが第7表である。自由な衣服を希望するものは、男子が25.7%で約半であるのに対し、女子は9.5%で $\frac{1}{10}$ にも満

第7表 自由な衣服についての希望 (%)

項 目	男 子	女 子
希 望 す る	25.7	9.5
ど ち ら で も よ い	38.8	33.9
希 望 し な い	35.5	55.0
そ の 他	0	1.7

たない。希望しないものは、逆に女子が多く55.5%で過半数をしめ、男子は35.5%で約半であった。いずれも希望しないものの方が多いが、男女差があり $\chi^2$  検定により1%水準で有意差がみとめられた。希望する理由をみると、①自由な衣服のよい点を認める②制服によくない点があるという2つに分類できる。男子の場合は、「気楽な」「自由な」「経済的」というように、①の積極的な理由によるものが多い。これに対して女子は、「不潔」「不経済」というような②に属する消極的な理由が多かった。次に、希望しない理由は③自由な衣服によくない点がある④制服によい点があるという2つに分けられる。女子は③によるものも多く、自由な衣服は「派手になる」「服に気を使って悩む」「競争になる」「差別が出来る」などの理由から希望していない。男子の場合は、「派手になる」という理由をあげているものもいるが、それよりもむしろ④によるものも多く、制服

は「学生らしく」「経済的」なので希望しないとしている。以上のことより男女の反応の違いを考えると、男子は自由な衣服のよい面をみとめ衣服の自由化を希望したり、制服のよい点をみとめて希望しないというパターンをとっていた。これに対し、女子の場合は自由な衣服のよい面に注目するよりも、実際に自由な衣服になったら「派手になる」「服に気を使って悩む」というように、実現した時に起こるであろう状況を予測して希望しないというパターンをとっていた。つまり、どちらかといえば女子の方がファッション的に服種も多く、派手になる傾向があるため、非常に消極的で保守的な態度をとっているものと思われる。

次に、中学生と高校生の衣生活をみるため制服以外の所持数を示したものが第8表と第9表である。第8表には、比較のため高等学校家庭一般教科書に掲載されてい

第8表 私服の所持数(女子)(枚)

服種	年令				「家庭一般」 例
	中学	高校	最大	最少	
スカート	8.8	8.3	23	0	6
シャツ・ブラウス	11.5	11.0	40	2	8
セーター・カーディガン	8.2	6.9	31	1	8
ジャケット類	2.7	2.4	30	0	1
ワンピース・スーツ	4.7	3.5	25	0	7
ズボン	4.4	3.7	12	0	2

第9表 私服の所持数(男子)(枚)

服種	年令			
	中学	高校	最大	最少
ズボン	5.1	5.4	28	1
シャツ類	8.3	11.0	50	1
セーター・カーディガン	4.7	5.9	20	0
ジャケット類	2.1	2.8	10	0

る高校女子の被服計画例の所持数を示した。所持数は、最大と最少をみるとかなり個人差が認められるものの、大体において豊かな衣生活を送っているものと思われる。

また、今回の調査を行なった高校では、いずれも制帽はすでに自由化されて、かぶってもかぶらなくてもよいということになっており、近距離の外出時には私服でもかまわないというように、服装規定がかなり弾力的に運

用されてきている。

したがって、生徒たちは私服を適当数所持し着用しているため、かえって制服の役割やよさを認識することが可能となり、制服として規定されていることへの反発がそう強くないものと理解できる。そのため、つめえり学生服の着心地、嗜好やイメージなど、衣服の自由化におよぼす概念は決してプラスのものばかりでなく、むしろマイナスの傾向が強いかかわらず、自由な衣服を希望するものがあまり多くないという状況をもたらしたのではなかろうか。

以上のように、つめえり学生服は改良すべき点が多く、また拘束されることを好まない青年期のものが着用する衣服であるため、制服廃止という意見が多いであろうと予測していたが、制服そのものの価値に注目するというよりも、むしろ他の衣服との関連で制服が肯定されているものと理解できる。特に女子にその傾向が強くみられた。

#### IV 要約

中学生と高校生のつめえり学生服に対するイメージをS・D法により計量化し、このイメージに影響を及ぼす嗜好や着心地、色とデザインに対する評定、衣服の自由化に対する態度などを明らかにし、さらに各概念間の関連を性や年令の違いによって検討した。本研究より得られた結果は次のとおりである。

①つめえり学生服に対しては、象徴性や容儀性や機能性や審美性に関するイメージが特に強く意識された。性別にみれば、女子の方が男子より、また高校生より中学生の方がプラスのよいイメージを抱いていた。そして、男女差の大きいものは、外観的なファッション性、年令と経済性に関するイメージであり、年令差の大きいものは規律に関するイメージであった。

②イメージ用語の相関関係は、男女とも中学生より高校生の方が高く、年令がすすむにつれてイメージは集約される傾向であった。

③つめえり学生服に対するイメージは、現代因子、規律因子及び経済因子の3つから説明できた。しかし、衣生活の自由化や多様化傾向の著しい今日では、それらの因子の中でも特に現代因子による寄与が高かった。

④つめえり学生服は、「学生らしい」という理由によって男子よりも女子に好まれていた。男子が嫌う理由としては着心地の悪さが最大の原因であった。

⑤イメージのよい、悪いと嗜好の関係は一致しており、嗜好はイメージを決定する一要因であった。

⑥えりの着心地は一般に悪いと感じられ、その傾向は中学生よりも高校生の方に著るしかった。中でも、物理・化学的性質と生理・衛生的性質は着心地を低下させる原因になっていた。しかし、つめえり型を他のデザインに変更することを希望するものは少なく、ほとんどのものが現状のデザインを認めていた。つめえりの着心地と嗜好との関連は高く、着心地は嗜好を決定する大きな要因であることがわかった。

⑦デザインと色については、男子よりも女子の方により評定がなされていた。そして嗜好との関連については、色よりもデザインとの間に高い関連がみとめられた。

⑧学生服として自由な衣服を希望するものは、男子で約 $\frac{1}{4}$ 、女子では $\frac{1}{10}$ ときわめて少なく、男女によって差がみとめられた。また、希望しない理由としては、自由な衣服にはよくない点があるということあげているものが多かった。

本研究を終えるにあたり、調査に御協力いただいた中学校及び高等学校の関係者、統計手法に関して懇切な御指導をいただいた島根大学藪内稔助教授並びに調査、集計を通じて終始御助力いただいた山本明子氏に厚く御礼申し上げます。

## 参 考 文 献

- 1) 江馬務：江馬務著作集第二巻服装の歴史 中央公論社, 233 (1976)
- 2) 今和次郎：服装論 ドメス出版 212 (1973)
- 3) 教育社会学会編：教育社会学辞典 東洋館 46 (1973)
- 4) Osgood, Suci & Tannenbaum: The Measurement of Meaning, Univ. Illinois Press, 76~85 (1957)
- 5) 北川敏男, 喜安善市編：記号行動論—意味の科学 共立出版 48~55 (1967)
- 6) 桂広介：青年心理学 金子書房 280~281 (1955)
- 7) 奥野忠一他：多変量解析法 日科技連 326~356 (1976)
- 8) 川崎健太郎他：織消誌 16, 43 (1975)
- 9) 水梨サワ子他：織消誌 13, 275 (1972)
- 10) 柳沢澄子他：被服構成学 光生館 100~101 (1973)
- 11) 稲垣長典他：家庭一般 学研書籍 149 (1975)